

中長期目標
(学校ビジョン)

聴覚障がいのある幼児・児童・生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。

めざす子ども像

【知】学び合う子
【徳】かなえる子
【体】やりぬく子

今年度の基本方針

＜基本方針＞

- 一人一人のきこえに応じた学びの充実
- 子どもたちが主役となり「わかる」「できる」「たのしい」と感じる授業づくり・保育づくり
- 自分のきこえを知る・自立活動の充実
- 自分のよさを知り、のばす、夢に向かう取り組みの推進
- からだを動かす楽しさを知り、からだづくりを生活の中に位置づける

＜学校の合い言葉＞「鳥聾愛」
＜学部テーマ＞
○幼稚部…思いをことばに
○小学部…レッツ チャレンジ！
○中学部…Let's Enjoy
○高等部…夢をつかめ！
○支援部…めざせ！みんなの頼れるサポーター！！

年 度 当 初					評 価 結 果 (2月)		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
[知]学び合う子 1. 社会で生き抜く力を身につける ①一人一人のきこえに応じた学びの充実 ②「わかる」「できる」「たのしい」と感じる授業づくり	(幼) ・体験、経験の言語化 ・朝の会のトピックスや絵日記発表	・自分の思いを伝えたい気持ちがある。 ・きこえにくさにより情報量が少ない。	身振りや手話、キューサイン、音声などでのびのびと自分の思いや考えを伝えようとしている。	・子どもの目線になり、気持ちに寄り添い、様子や気持ちにことばを添えたり、手本を示したりする。 ・身近な自然現象や事象をトピックスとして取り上げことばと繋げたり、絵日記発表で思いをことばにする手本を示したりする。	・教師が子どもの思いを聞く姿勢を示すことで、自分の思いや考えを伝えようとする意欲が育ち、他者に思いや考えを伝えるようになった。 ・教師の手本ややりとりの様子をよく見て、模倣しながら手話やキューサインを覚えた。覚えた手話やキューサイン、音声で、表情豊かに自分が伝えたい内容を自分なりの表現で伝えるようになった。	A	・その日体験したことを思い出して、身振りや手話、キューサイン等で表現し、丁寧に振り返る。 ・キーワードになる手話をみんなで表現してみる。
	(小) ・体験的な学習 ・聞こえや実態に応じた学習指導の充実	・聞こえや発達段階に個人差があるが、意欲的に学ぼうとしている。 ・考えて解く・まとめる等の学習では、あきらめてしまうことがある。	相手に分かるように自分の思いや考えを伝えようとしている。	・体験的な学習の機会を多く設定し、ことばの土台を育てながら、思いや考えを発表する場を設ける。 ・学部研究を通して、実態把握を行い、児童に合った目標設定、授業作りを行う。	・集団で行事の事前事後学習や体験活動を行い、体験とことばを結びつけ、ことばの拡充を図った。また、模倣や復唱を促したり、学習の足跡を掲示として残したりするなど、ことばの定着を図ることができ支援を学部全体で共通理解した。学部研究会や一人1授業を通して、授業検討、鳥豊スタンダードの小学部の重点項目の確認を行い、指導力の向上を図った。	A	・子どもの気持ちが動く機会を捉え、子ども同士のやりとりでは教師が仲立ちをしながら、相手に伝えたいという思いが育つよう、今後も支援したい。 ・ことばの力を土台に、学力向上につながる取り組みとして、毎朝の帯自立活動や隙間時間でのミニプリント学習に取り組みたい。
	(中) ・学習規律 ・目標設定と振り返り ・話し合い活動	・ルール、やり方が明示してあると取り組みやすい。 ・学校生活を楽しみにしている。 ・思いを言語化することに課題がある。	自分の目標をもって学習に取り組んでいる。	話し合ったり、協力し合ったりする体験の工夫をする。(各種行事の工夫)	昨年度と同じメンバー(生徒)の中で、今年度は大人とのやりとりから生徒間でのやりとりにステップアップしたと思う。年度末に向けてコミュニケーションの面で成長したことや他の人の成長したなど思うところを生徒にフィードバックできると自信につながると思う。	B	地域社会で学んだことをこれからの生活に行かせるような学習設定を継続して設定していきたい。
	(高) 語句を丁寧に押さえ、生徒の思考や発言を大切に する授業づくり	・日々の授業に真面目に取り組んでいる。 ・一人一台端末を日常的に使用している。 ・言語面やコミュニケーション面でつまずきがある。	自分の考えを積極的に発言している。	一人一人の生徒の実態を踏まえた分かりやすい授業づくりと、生徒が思考し発言する機会の充実を図る。	研究テーマが「語彙の習得」という点で高等部での進め方に難しさがあったが、対象生徒の実態から重点課題を抽出し、卒業までに身に付けたい言葉の力を育てる取組ができたことは意義深かった。生徒の実態を踏まえた分かりやすい授業づくりや、生徒のコミュニケーションの力に改善や変容があった。	B	卒業後の生活を見通し、トップダウンの視点で育てたい力を焦点化することで、生徒の言葉の力の向上を図りたい。
	(教務部) 円滑な学習活動、行事の遂行	・素直な子どもが多い一方、消極的な面もある。思いを伝える経験が積み上がってきた。 ・教師は個別の教育支援計画等に基づいて指導しているが、効果的な活用には至っていない面がある。	子どもが「わかる」「できる」「たのしい」と感じる授業が展開され、アンケートで「学習がわかる」95%「授業が楽しい」90%と答える児童生徒が増えている。	・各教科、各学部間の連絡調整を密に行う。 ・定期的に教科会をもち、教科指導の充実を図る。 ・個別の指導計画の記入のポイントを周知し、計画や評価が指導に生かせるようにする。	・授業や行事に関して学務教務を中心に各学部間の連絡調整を密に行うとともに、毎月の出席簿点検を行い授業時数の把握に努めた。 ・教育課程の作成に当たり、教科会をもち、意見交換を行う機会を設定した。また、学部間での検討の機会を持つことで、特に重複学級については、より系統的な教育課程にしていけることができた。 ・児童・生徒へのアンケートの「学習が分かる」「学習が楽しい」という項目において公的な回答が100%だった。 ・個別の指導計画の書き方について各学部で確認を行った。	B	・授業や行事に関して各教科、各学部間の連絡調整を密に行う。(継続) ・毎月の出席簿点検と併せて、授業時数の状況を大まかに把握する。(継続) ・定期的に教科会の時間を設け、各教科での連携や教科横断的な連携ができるようにする。 ・個別の指導計画の点検を行い、必要に応じて書き方について確認する場を設ける。
	(教育研究部) 幼児児童生徒の語彙の習得を目指す～「鳥豊スタンダード」の活用とアセスメントに基づく指導～	「鳥豊スタンダード」による授業作りを行っており、子どもの伝え合う力が向上した。さらに子どもの語彙力を向上するためには「鳥豊スタンダード」の一層の活用と、アセスメントによる実態把握、一貫した指導が必要である。	「鳥豊スタンダード」を効果的に活用するとともに、アセスメントに基づく一貫した指導を教師が協力して行い、語彙の習得に向けて取り組んでいる。	・学部研究会を定期的に関き、語彙の習得に向けた指導・支援の検討、「鳥豊スタンダード」重点項目の設定、授業のふり返りを行う。 ・外部講師を招聘し、指導の改善を行う。 ・参観週間を設けて授業公開し、授業研究を進める。	・学部研究会を1ヶ月に1回開き、語彙を習得するための指導・支援について検討した。検討した内容を反映させた授業参観シートを活用して授業を行い、学部研究会にて授業検討会を行った。 ・9月の全体授業研究会にて金沢大学の武居渡先生に研究内容と授業について助言を受けた。 ・教師同士でお互いの授業を見合う機会として参観ウィークの期間を設定し、語彙の習得に向けた指導・支援や鳥豊スタンダードの重点取組項目を含む授業参観シートを作成した上で、授業を行った。	A	・今年度のテーマと方法を引き継ぎ、来年度の幼児児童生徒に合わせた指導・支援方法を検討、「鳥豊スタンダード」重点項目の設定、授業のふり返りを定期的な学部研究会にて定期的に行う。 ・外部講師を招聘し、指導の改善を行う。 ・参観週間を設けて授業公開し、授業研究を進める。
(情報部) 子どもの学びを深めるためのICT活用	各教師がタブレットやアプリ等を効果的に使う授業が増えてきたが、優れた実践を校内で共有したり、取り入れたりすることが少ない。	「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」において「ICT機器を計画的に活用している」と答える教職員が8割以上である。	・ICT機器とアプリケーションの使い方・活用法に関する研修やオンラインやオンデマンドの活用に関する研修を定期的に催す。 ・教職員同士で情報共有できる場を設け、校内のICT活用の促進を図る。	・お役立ち勉強会を5回実施した。今年度途中に導入されたCanvaの使い方に関する研修を2回行い、多くの参加者があった。教職員へ周知することができた。 ・ICT活用に関する研修に参加している教職員から資料を供覧したり、研修報告会を開いて教職員への情報提供を行った。	B	・お役立ち勉強会を引き続き行い、ICT支援員の助言を受けながら、便利なソフトやGoogleWorkspaceの活用方法など、学習や校務に活かせる情報を伝えられるようにする。 ・日々の行におけるICT活用に関するアンケートを行い、教職員がICT活用対してどのような困り感や悩みを持っているのか把握し、研修の内容に組み込む。	

年 度 当 初					評 価 結 果 (2)月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
[徳]かなえる子 2. こうなりたい自分・夢をもつ ③自分のきこえを知る ④自分のよさを知り、のばす、夢に向かう取り組みの推進	(幼) ・やりとりを楽しみながら共に遊ぶ活動 ・友達へのあこがれや、手本になろうとする気持ち	・好きな遊びがある。 ・友達や他者と関わることを好む。 ・気持ちを伝える言葉や手段が少ない。	楽しく遊んだり活動したりする中で、自分から友達に関わろうとし、自分の良さや友達の良さ、一緒に活動する良さを知る。	友達に伝えられた、友達の気持ちが変わったという達成感や満足感が感じられるように、伝えたいことの身振りや手話、キューサイン等の手本を示し模倣を促す。	・登下校時に子ども同士で挨拶するようになった。 ・給食を食べながら手話や身振りなど自分なりの表現で伝え合う様子が見られるようになった。 ・友だちが褒められているのを見て、自分も良い行いをしようとする様子が見られた。 ・友だちへの伝え方に意識して、相手に伝わるように手話を大きくはっきりしようとするようになった	A	・子どもがより遊びに集中できるような環境を設定する。 ・話している友だちを見るように促す。
	(小) ・友達や教師と関わろうとする姿の育成 ・自己肯定感の向上	・友達や教師と関わりたい気持ちを持っている。 ・他者との関わりが限定されがちで、自分のよさに気づいていない子どもが多い。	友達や教師との関わりを楽しみ、自分のよさに気づいている。	・コンクールや検定等に挑戦する。 ・教師や友達から自分のよさを伝えてもらう機会を設定する。 ・遊びや集会のゲームを友達と相談して決める等の機会を設定する。	・掲示した絵画や工作のそばに用紙を置き、感想を記入してもらったり、検定・コンクール等で賞をもらったりすることで、自分や友達のよさに気づき始めている。 ・よりよい「聞き方・話し方」を学部全体で共有し、意識づけを図ったり、学校祭ステージ発表では、話し合い活動により児童が自分たちで内容や台本を作り上げていく経験を積んだりした。聞き手を意識したり、やりたい気持ちに折り合いをつけて譲ったりするなど、一人一人の児童の成長が見られた	B	・学部としての仲間意識、集団規律を学ぶ機会がコロナ禍で不足していた実態もあった。教室移動や学部遠足の際にリーダーを先頭に一列に並んで歩いたり、朝の係活動や給食当番活動をしたりする中で、少しずつ周りを見て動くことや人に合わせることなど、小学生としての仲間意識や集団規律を今後も継続して取り組みたい。
	(中) ・自分を知る ・進路学習 ・進路選択	・素直で、互いを思う気持ちを持っている。 ・自分の良さや課題についてあまり把握していない。 ・将来に対するイメージをあまり持っていない。	自分の良さを知るとともに、相手の良さや思いを受け止め、自分の思いを伝えている。	学年に応じた進路の充実を図る。(職場体験学習や高校見学などの活用)	・3年生は、本校高等部、倉吉総合産業高校や敬愛高校の体験・見学や居住地での高校説明会等を経験し、多様な選択肢を知った上での進路選択につながるようになった。2年生は、3年生の姿が自分たちの未来を想像するきっかけになった。	B	・総合の時間の工夫(総合をがっちりする月、教科学習をする月)を教務として年度当初に配分をする。 ・見学を通して感じた魅力と自己理解の間の揺れも大きくあるので、自己理解の学習を深める。自分で進路選択ができるよう、計画的に学習を進める。
	(高) 一人一人の生徒の実態を踏まえた目標設定と計画的な進路学習の実施	・自己肯定感が育ちつつある。 ・地域(学校外)や卒業後の生活に意識が向いてきた。 ・自主的・計画的に学習することが苦手である。	進路実現に向け、自主的・計画的に取り組んでいる。	進路実現に向けた目標や活動の明確化と継続的な進路指導により生徒の自主的・計画的な取組を促進する。	・各生徒の進路選択に関する悩みや不安に寄り添い、担任・進路指導主事・家庭が密に連携することが、計画的な進路学習の取組に不可欠であった。企業見学や職場体験など体験機会を積極的に設けたことは生徒の意思決定を促した。	B	・自己の考え方や生き方を見つめ進路学習の充実につながるよう、総合的な探究の時間の改善を図る。
	(支) ・相談者が安心して頼れる支援体制・支援内容の充実 ・センター的機能の発信の充実	・子ども同士、保護者同士がつながり、知り合い相談し合う機会が年1～3回と留まっている。 ・関係機関等へのに対して本校の取組発信が十分とはいえない。	・子ども同士・保護者同士がつながる機会として、合同活動及び保護者研修会を年7回以上実施する。 ・相談者のニーズに応じた迅速な対応や手立てを行うことができる。	・合同活動及び保護者研修会を二ヶ月に1～2回の頻度で計画的に設定し、参加を募る。 ・関係機関に啓発するためのポスター(リーフレット)、HP(支援部ページ)を作成し、発信する。	・計画に沿って合同活動及び保護者研修会を実施し、計9回行った。参加人数が少ない月もあるが、保護者の中に月1回行うという意識が定着してきている。 ・支援部ポスターと、HP(支援部ページ)をリニューアルした。相談内容や連絡先などを見やすくしたHPに、ポスターのQRコードからつながるようにしたこととで相談希望者に必要な情報が伝わりやすくなった。早期支援に関係する機関(耳鼻科、保健センター・補聴器店)にポスターを配布している	A	・見通しを持って参加しやすいよう、4～5月の段階で年間日程と内容の案内を保護者に提供する。 ・来年度、園・学校関係にもポスター配布を行う。また、支援部相談啓発カードを作成し、さらに相談がつながりやすい発信方法を整える。
	(自立活動部) 自立活動の指導を円滑かつ効果的に行うための教職員研修	・発音、言語、障がい理解等に関する教職員研修を行っている。昨年度から、すぐに授業に生かせる研修になることを目標に、研修を計画、実施している。	・アンケートで「授業や子どもとのコミュニケーションに活かせる研修である」と回答した教職員が、8割以上である。	・全体研修会を年1回、言語または発音に関する研修会をそれぞれ年4回実施する。事後アンケートを実施し、目標の達成度把握と研修の改善に生かす。 ・「コミュニケーション手段について」の研修動画を作成し、活用を促す。	・8月に全体研修会を1回行い、全体研修会の研修会の職員アンケートで「良い」という評価が90%以上であった。自立活動勉強会は計画通り行った。「良い」という評価が90%以上だった。 ・「コミュニケーション手段について(着任研)」の研修スライド(PP)は完成したが、動画撮影がまだできていない。2月中には完成し、来年度の着任研で活用できるようにしたい。	B	・全体研修及び自立活動勉強会の職員アンケートの回答内容を鑑み、来年度の自立活動勉強会の研修内容や開催方法などを考案する。 ・計画的に自立活動勉強会に関する研修動画も作成する。また、作成した研修動画や資料の活用方法や内容の工夫や改善も図っていく。
	(進路指導部) ・ニーズに合った情報提供 ・将来働く上で必要な力の定着	進路に関するニーズが多様であり、体験学習の充実やキャリアパスポートの活用と学部間連携が必要である。	・卒業後や次年度に向け、将来働くために必要な力を身につけるための指導や支援を行っている。 ・キャリア教育の充実に向け、キャリアパスポートを活用するなどして発達年齢に応じたキャリア形成をしている。	・子どもや保護者の考えを聞く機会を設けて実態把握をし、見学先や実習先を決定していく。 ・進路学習や体験学習の成果や課題などを自身で振り返ったり保護者と共有したりするためにキャリアパスポートの活用を進める。	・生徒や保護者の考えを担任や本人に聞きながら把握し、見学先や実習先を選び、それぞれの進路選択の一助となった。 ・卒業生の進路について関係機関と随時連携を取り、移行支援会議を実施するなど情報共有することができた。 ・各学部との連携や分掌の中の仕事の分担など学校全体のキャリア教育の一貫性について、再度検討していきたい。	C	・進路指導については引き続き生徒や保護者のニーズに応えるよう実態把握に努める。 ・卒業生のフォローアップが必要があれば、関係機関と連携して随時実施する。 ・再度一年間の進路指導に関する計画を見直し、役割分担を明確にする。 ・進路について、さらに見通しを持って実施することができるよう説明し教職員の意識を高める。
	(総務部) ・幼児児童生徒の頑張りや学校の魅力の発信	・子どもは素直な一方で受身的な面があり、自己肯定感の育成に取り組んでいる。 ・子どもの数の減少に伴い、学校の在籍数も減っている。学校の魅力を一層発信する取組が必要である。	・子どもが自分や友達の良さ、頑張りやを互いに認め、たたえ合う姿がある。 ・地域からの入学希望者が各学部にいる。	・表彰伝達や学校通信、掲示物等の充実を図り、子どもが自分の良さや頑張りに気づく機会を増やす。 ・学校公開の内容や学校通信の発送方法を見直し、効果的な発信となるよう工夫する。	・表彰伝達や学校通信、掲示物等の充実を図り、子どもが自分の良さや頑張りに気づく機会を設けた。全校が集まる場面で、自分の頑張りを発表する姿が見られた。 ・学校公開の内容や学校通信の発送方法を見直し、効果的な発信となるよう試みた。地域からの入学希望に直接はつながっていないが、学校公開には多数の来校者があり、広報啓発になった。	B	・表彰伝達や学校通信の発行を丁寧に行う。掲示物(校内・校外)の充実を図り、子どもが自分の良さや頑張りに気づく機会をもっと増やす。 ・学校公開の内容について改めて検討し、案内を個別に声掛けする等の工夫をする。(地域支援の情報データを活用したい)

年 度 当 初					評 価 結 果 (2)月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
[体]やりぬく子 3. あきらめない体力・気力 ⑤からだを動かす楽しさを 知り、からだづくりを生活 の中に位置づける	(幼) ・基本的生活習慣の自立 ・安全に身体を動かす機会の設定	・身体を動かすことが好きである。 ・身体の機能や体力、運動経験に差がある。	いろいろな遊びや活動の中で自分からすすんで参加し、のびのびと身体を動かす。	・「歌と体操」や「おはようタイム」など毎日取り組む時間帯に身体の動きを意識する活動や身体を動かす活動を設定し、継続して身体作りに取り組む。 ・外部講師による専門的な指導（チャレキング）の機会を設ける。	・おはようタイムで取り組んだ動きをすすんで他の場面や家庭でしてみる等、自発的に体を動かす姿が見られた。 ・普段の生活でしないような動きを外部講師による専門的な指導の時間に取り組むことができた。 ・中庭や校庭でカー杯体を動かして遊ぶ時間をあまり設定できなかった。	B	・年間の活動計画で外遊びの時期を決めておく。 ・遊具（ブランコ）の設置を希望。 ・外遊びが出来ない時、講堂や体育館で体を動かす活動を設定する。 ・自由遊びの前に短時間でも体を動かす仕掛けを作る。（サーキット的なイメージ。片足跳び、バランスなど）
	(小) ・体力の維持・向上 ・動きの経験の拡大	・体を動かすことを好む子どもが多い。 ・生活経験の少なさから遊びや活動が広がりにくい。	体を動かす楽しさを知り、進んで体を動かそうとしている。	中間休憩のサーキット活動や外部講師の指導の機会（ちゃれきんぐ、ダンス等）を設定し、様々な動きの経験、体力の維持向上を図る。	・週に2回のレッツチャレンジタイムでは、鳥取県「遊びの王様ランキング」を参考にした大縄跳びや新聞やり投げ等を行った。体育や休憩時間の活動を通して、様々な動きのレパトリーを増やし、体力の維持向上を図った。 ・外部講師の指導では、普段しない体の使い方を教わったり、ダンスを通して主体性と身体表現の力を伸ばすことができた。	A	・冬になると体を動かす機会が減ったり、祝日や行事等で活動できない日もあった。年度初めに年間のレッツチャレンジ計画を立て、体力の維持向上を図りたい。
	(中) ・基本的生活習慣の定着(挨拶・服装・言葉遣い) ・基礎体力の向上(運動への積極的な参加)	・友だちとの活動を楽しむことができる。 ・基本的生活習慣の定着に課題がある。 ・学習に向かう基礎的な体力が充分ではない。	基本的生活習慣や学習に向かう基礎体力を身につけている生徒	基本的生活習慣（挨拶・身だしなみ・場に相応しい応答等）の定着と基礎的な体力の向上を図る。	・問いかげに「はい」と返事することが4月より増えた。 一年間を通して声かけを行うことで、挨拶返事について定着が見られた。 場に応じた言葉や身なりについては、引き続き指導が必要である。	B	社会で当たり前とされるマナーについて、教師も指導意識をもって指導する。 生徒に身につけさせたい力（挨拶・身だしなみ・場に相応しい応答等）を教員間でも共有し、指導を継続する。
	(高) 生徒の挨拶等への意識向上と習慣化	・部活動にやりがいを持ち、積極的に体を動かすことを楽しみ、スポーツを楽しむ、積極的に大会へ参加している。 ・挨拶や返事、提出物等が習慣化していない生徒が多い。	挨拶や返事、提出物等の習慣が身に付いている生徒	生徒アンケートや日々の生活・学習を通して、挨拶や返事、提出物等への意識向上と習慣化を図る。	学校祭の週を挨拶強化週間とし、各生徒が個人目標を設定して取り組んだことは有効だった。教師が率先して挨拶しロールモデルになること、日頃から課題意識を持たせ生徒の意識を高めることが必要であった。	B	積極的に挨拶ができる力を育てるため、取組を継続する。
	(生活安全部) ・健康で安全な生活習慣の徹底 ・健康維持を意識し、体を動かす楽しさを知る活動の設定	・運動を楽しむ子どもがいるが、継続な取組にはなりにくく、行事に向けた単発な活動になっている。 ・学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画をもとに様々な取組を行っているが、日々の実践につながりにくい。	進んで体を動かし体力をつけるなど、子どもが健康な生活習慣の大切さを理解し、実践しようとしている。	・長期休業の事前・事後指導の充実を図り、生活習慣（生活リズム）の見直しを行う。 ・全校遠足、駅伝大会など楽しく身体を動かす活動を計画する。 ・各学部の実態に応じて健康維持を意識した取組を実施する。	・後期の生活アンケートを実施し実態把握を行った。食事、生活時間に対する意識が高まり、より健康的な生活をしようと心がけていることが伺われた。メディア時間、運動時間は変化が見られなかった。 ・健康維持を意識した取り組みを各学部、体育の授業等で実施した。体作り運動や筋力トレーニングに取り組み、体を動かすこと、体を鍛えることの大切さについて指導を行った。取り組みに対する態度には個人差があった。	B	・生活アンケートを継続し、自分の生活をふり返る機会を設ける。心がけていること、改善するためにどうするかなど記述する欄も設けることで、具体的な改善につなげる。 ・健康づくりには、毎日の積み重ねが大切であることを意識できるように、指導・啓発を継続する。心の健康にも意識を向けて取り組む。 ・マラソン大会・大会参加など行事も活用しつつ、目標をもって体を動かすことに取り組めるようにする。
4. 業務改善 ⑥子どもと向き合う時間を 充実するための業務改善	(働き方改革) ・業務分担が行われ、適切な業務遂行がなされている。	自分自身の働き方にメリハリをつけ、自己管理の意識が高まってきている。しかし、年度始めや行事前に業務が集中してしまう傾向にある。	・月45時間以上の超過勤務者数、年360時間以上の超過勤務者数1割未満。 ・業務支援員の積極的な活用。	・毎月2～3回の帰らぬ日を設定し、計画的な業務、時間の使い方の意識を高める。 ・役割分担、業務改善へつなげることができるよう、時間外勤務の理由の聞き取りを行う。	・2学期以降、月45時間以上の超過勤務者がほとんどなくなった。個人個人が働き方に対してのメリハリをつけることができようになったと思われる。	A	・新年度へ向けての年度末の引き継ぎ準備等で勤務時間が超過しないよう、早めの声かけを行っていく。 ・引き継ぎ書類のデータ、ペーパーを確実に引き継ぐことができるよう、誰から誰へ引き継いだのかがわかるようにしておく。
	(円滑な学校運営) ・各学部主事主任、分掌部長が活発な意見交換、斬新なアイデアを出せる会議の開催。	・行事・研修等で前例の踏襲ではなく子どもたちの状況や学校の方針に応じた提案が多くなっている。しかし、中には、今までの手法にこだわりがあったり、変化を受け入れるのに不安があったりする職員もいる。	・各分掌・学部行事等に新しい取り組みが加わり、戦略を意識した活動が考えられており、子どもたち、教職員に成長がみられる。	・運営委員会、主事会等の会議の中で、活発に意見を言うことができる雰囲気を作る。	・各学部が積極的に各種コンクールに応募する姿勢が見られた。応募した結果、賞を受賞し、子どもたちの自信、自己肯定感の高まりにつながっている。 ・教師の働きかけにより、子どもたちの挑戦意欲にもつながっている。	A	・今後も、コンクール等への応募を行っていく。 ・業務改善とも併せ、行事等の見直しを行っていく。

評価基準 A:十分達成(100%) B:概ね達成(80%程度) C:変化の兆し(60%程度) D:まだまだ不十分(40%程度) E:目標・方策の見直し(30%以下)